

健康文化

ケニア・タンザニア見聞記
—JICA アフリカ人づくり協力プロジェクトとバオバブ寸見—

北川 勝弘

本年（2003年）3月に私は、国際協力事業団（JICA）の用務で2年ぶりにケニアとタンザニアを訪れた。今回の出張目的は、東アフリカ3ヵ国（ケニア、ウガンダ、タンザニア）を対象とするJICAの「アフリカ人づくり拠点（AICAD）」プロジェクトの国内委員会メンバーとして、ケニアの首都ナイロビ近郊にあるAICAD本部で開催される、貧困克服に役立つ研究課題を審査する会議で助言することであった。その会議出席に先立ち、タンザニアも訪問した。本稿では、AICAD本部で開催された研究課題審査会議について、“在来の知識を活用して地域発展を目指す”という問題意識に焦点を当てて紹介し、あわせてタンザニアで大学巡りの道すがら見かけたバオバブ等について、紹介したい。

AICADとは、貧困克服を目指す実践的な研究教育を大学に定着させることを目的として2年前（2001年）の1月に発足した、東アフリカ3ヵ国の12国立大学で構成されるコンソーシアム（研究共同体）である。発足当時は8大学で出発したが、昨年、新たに4大学が加盟した。AICADでは活動の柱の一つとして、貧困克服を目指す実践的な「研究開発」の推進を掲げており、昨年9月、AICAD加盟大学に所属する研究者を主な対象として、“貧困克服につながる研究課題”を公募した。応募総数261件につき約半年かけてアフリカ人専門家による審査を行った結果、26件に絞られたので、これらの研究課題を提出した研究者に一同に集まってもらい、共同研究として調整し直す可能性がないかどうかを含めて審査しようという趣旨で、JICAの予算により審査会議が設定された。この審査会議は、日本学術振興会による科学研究費の研究課題審査の最終審査段階とほぼ同様の意味合いをもつものであると同時に、個々の研究者に対して「共同研究」というものについて構想する視点を体得してもらうという意味も併せ持たせたもの、と行ってさしつかえないであろう。未だほとんどの専門分野で学会組織もない東アフリカの研究者たちにとって、「貧困克服に結びつく実践的な研究の推進」という共同目標のもとで、狭い専門分野を越えた場で各自の研究を発表し合い、質疑を交わす機会を持つことの意義は、きわめて大きい

ものといえる。

今回の研究課題審査会議に至る前段として、先ず昨年7月に AICAD 事務局から加盟各大学宛てに、以下の条件による研究公募がなされた。

「(1) AICAD の主要な目的が「東アフリカ地域の貧困克服」にあることを踏まえて、募集する研究課題を6分野（20区分）とする。

1. 食糧安全保障（Food security）
2. 中小企業開発
3. 環境保全
4. 地域社会開発
5. 水資源の管理保全
6. 健康確保（Health equity）

(2) 研究応募に際しては、以下の諸点を留意すること。

1. 在来知識に基礎を持つ
2. 共同研究化できる余地を持つ
3. 研究成果を適用できる対象地を持つ

(3) ジェンダー、教育、地方—農村生計、社会的弱者に関わる課題には、特に配慮する」

今回、261件という多数の応募研究申請は、多数のアフリカ人専門家の協力による半年間にわたる第1次審査を経て、26件に絞られた。第1次審査を合格した申請研究課題は、上述の通り研究募集の段階から、“地域の貧困克服に結びつくテーマ”を重視する、という基本理念に基づいて組み立てられているため、欧米流の（昨今では、わが国の農学研究でも例外ではないが）“研究のための研究”に墮する危険性はもともと少ないといえる。AICAD プロジェクトを運営する予算のうちで、アフリカ人の人件費は東アフリカ3ヶ国が応分の負担を行い、JICA は日本人専門家についての人件費と研究開発等の事業予算を負担することになっている。ちなみに、採択される研究課題1件当りの年間研究費配分額は、「1万米ドル（約120万円）以下」と募集要項に明記されている。

3月10日から13日まで行われた審査会議では、3ヶ国から招かれた第1次審査の合格者が、パワーポイント・スライドを使って各自の研究の“売りどころ”についてアピールした。その中でも、おそらく比較的最近に欧米で博士号を取得してきたばかりと目される若手研究者たち5～6人の発表ぶりは、専門分野にかかわりなく、それぞれ“発表の的”をうまく心得ていて、感心させられた。AICAD 本部の建物は本年1月に竣工し、事務棟や講義棟の他、研修員80名が宿泊できる40室の宿泊棟が付置されている。

研究課題の応募内容をみてみると、「食糧安全保障」の分野では、食料生産性

を高めるための害虫防除に関して、値段の高い農薬を使わずに、食品の安全性の点でも好ましい生態学的な防除方法を応用する、という発想に基づく研究が多かった。また、「健康確保」の分野に関する応募では、各地域で伝統的に用いられてきたいろいろな種類のハーブを、精神的な“癒し”や、マラリアその他の病気の治療薬として活用するための研究を、地域の人びとと共同して取り組む、という内容の研究申請が、国の違いを越えて4件も提出されていた。他の研究者の発表に対する質疑も大変活発に行われた。

私は今回の審査会議に参加して、アフリカ人研究者たちの各種研究調整能力が高いものだとということを実感した。たとえば、極めて多数の応募課題の中から10分の1に絞る第1次審査過程を調整したのは、AICAD事務局の研究開発分野を担当したジョモケニアッタ農工大学出身の教員だが、「できる限りフェアな審査を行う」ことをモットーとして、事務担当者の助手と協力しながら、仕事をやり遂げたのである。実に賞賛に値することだと思う。また、審査会議では自分以外の研究者の研究に対しても、「貧困削減を地域でより効果的に進めるためには、もっと***した方がよいのではないか？」等々の、建設的なアドバイスがやり取りされ、聞いていて好感を持った。今後の課題として、長期的には東アフリカ3ヵ国内で専門分野ごとの学会が組織されること、当面はAICADレベルでの学会誌の発刊が望まれるところである。JICAがそれに資金援助を行うことを期待したい。

ところで、私は審査会議に出席する前週の3月4日～7日の4日間、AICADプロジェクト・リーダーのJICA長期専門家と共に、タンザニアに赴いてAICAD加盟4国立大学を訪問した。AICAD加盟大学の副学長ら執行部とAICADに対する期待や要望（ニーズ）などについて意見交換を行い、今後のAICAD運営方針の見直し素材とすることが目的であった。それと同時に、私は個人的には、ソコイネ農業大学で講師のムソゴヤ氏を訪ねることにしていた。ムソゴヤ氏は昨年5月～7月の3ヶ月間、私の所属センターに客員研究員として滞在し、南南国際協力について私と共同研究を行ったが、彼が帰国してから作成中の論文について討議するつもりだった。この目的は、私が2月中旬にメールを通じて送信していたはずの、彼の論文原稿に対する私のコメントが彼の手許には届いていないことが判明したため、果たせなかったが、彼とは半年ぶりの再会を喜びあった。東アフリカ諸国の通信インフラは、まだまだ不安定だ。

さて、ソコイネ農業大学のあるモロゴロ市は、インド洋に面したタンザニアの首都ダルエスサラームから西へ直線距離にして100km、自動車ですら2時間半の

ところに位置している。ダルエスサラームとモロゴロを結ぶ道路の沿道には、サバンナが広がり、ところどころは開墾されて畑となっていた。人家の近くには、かなりの密度で樹木が植えられていた。そうした中で時折り巨大な樹木が点在していたり、細長い茎だけの植物が整然とびっしり植えられていたりしている光景が見えて、興味をかきたてられた。

タンザニアの道路を走っていて、誰にでもすぐ識別できる樹木といえば、おそらくバオバブが一番だろう。フランスの小説家サンテグジュペリの有名な小説「星の王子さま」にも出てくるので、誰でもその樹木の形を一度覚えたら忘れることはないと思う。もっとも、タンザニア国内のどこでもバオバブにお目にかかる、というものでもない。

私は2年前にタンザニアを訪問した際、同国北部のキリマンジャロ山に近いモシという町を中心として活動している JICA のキリマンジャロ稲作技術移転プロジェクトの現場を訪れたときに、初めて数本のバオバブの木をすぐ近くで見える機会を得た。そこは同プロジェクトの対象地で、いくつかの田圃を見下ろすように悠然と巨大な幹を空に伸ばしていた。そのとき、私は「永らく会いたいと願っていた相手に、今ようやく会えたのだな」という、一種の安堵感を覚えたのだ。その折りの“耳学問”として、バオバブの原産地はマダガスカル島であること、大昔、アラビア人の隊商がインド洋に面した港町からアフリカ大陸内部に交易のために通った道沿いに、バオバブの樹が広がったといわれること、などを知った。

今回のダルエスサラームからモロゴロへ向かう車道では、モロゴロの町の上に聳えるウルグル山地が間近に迫ってきたところで、数本のバオバブが点在しているのをようやく見かけた。その翌日、昨年2月に AICAD に加盟したばかりというムズンベ大学を訪問した際にも、モロゴロの町から南西に 10km ほど離れた場所の数ヶ所で、バオバブに出会った。ある樹は道路のすぐ脇に1本だけ高く幹を聳えさせ、ある樹々は道から遠く離れたサバンナのなかにほぼ 50m ずつ離れて3本並んでいた。

空港などで売られている絵葉書の場合、朝日か夕陽を背景にして、バオバブのシルエットが一段と浮き出るように撮影された写真が、好んで選ばれているようだ。私も典型的なバオバブの“芸術写真”を撮影したいと考えていたが、午後遅めであり太陽光線が弱くなっていたこともあって、薄く靄がかかった感じの写真になってしまった。残念至極である。

私自身は未だケニア国内にあるバオバブを見たことはないが、ケニア国立博

物館内にあるケニア在来知識活用資源センター (KENRIK) が 1999 年に発刊した、「Traditional Food Plants of Kenya」という 270 頁に及ぶ図鑑によれば、ケニアでもインド洋に面してタンザニアに近い地域や、中部のケニア山の東側から南へまっすぐタンザニアに至る地域に、バオバブが分布していると記されている。同書のバオバブ紹介を、以下に抜粋しておこう。

「学名は *Adansonia digitata* L. で、樹高は 15m にもおよび、不釣り合いに太い幹とくねった枝を持つ、グロテスクな落葉広葉樹。幹は柔らかく、繊維質で、樹肌は灰色で滑らか。葉はカエデのように掌状に分かれ、各小葉の長さは 13cm になる。花は白色で大きい。実は長さが最大 25cm になり、黄緑色／さび色の軟毛があって、硬い卵（楕円）形か円形の殻を持ち、しばしば縦裂が入る。種子は硬く、クリーム色もしくは白色の果肉に包まれている。乾燥させたクリーム色の果肉は、生で、あるいは水に溶かしミルクをかき混ぜて、食用とされる。皮は煎じて、幼児が高熱を出した場合に蒸気浴に用いる。果肉から作ったジュースは、解熱に用いる。」

見かけはグロテスクでも、アフリカ人の伝統的な在来植物に対する知識は、バオバブに対しても適切な役割を与えることを忘れてはいないようである。

他方、南アフリカ共和国の在来樹木を対象として記された「gardening with INDIGENOUS TREES」(STRUICK) という書籍には、バオバブの園芸用途面からの特徴について、以下のように触れられている。

「バオバブは、南アフリカ共和国内では北東の一部にのみ分布していて、落葉樹林内の標高の低いところに現れる。バオバブの形はグロテスクだが、カエデ状の葉、微妙にしわのついた花びらと大きな黄色い雄蕊（おしべ）の塊を持つ大きな白い花、ピロード状の毛を持つ球根状の実など、多くの魅力を備えている。こうもりが花の蜜を吸いに来る。いろいろな鳥や動物が樹冠や幹の穴に巣やねぐらをつくる。種子を植えるときは、新鮮なものであるほど望ましい。バオバブの寿命は 2,000 年と推定されるが、初期成長は必ずしも悪くない。夏季が温かければ（南半球なので日本とは季節が逆であることに注意）、成長率は 50cm/年となる。植栽後 4 年で、幹の下部の太りが出てくる。それ以後の成長具合は、土壌条件により左右される。粘土質土壌であれば、幹の下部は急速に太くなり、6 年生くらいで良い形をしたミニチュアのバオバブが得られる。」

私がこれらの図鑑の解説文を読んだのは、もちろん帰国してからだが、“グロテスク”な形が特徴であるバオバブについて、やはり現地の住民たちは伝統的にいろいろと“賢い”付き合い方をしているのだな、という感想を持った。AICADの研究課題審査会議の場でも、そうした一端が研究者の手によって紹介されていたわけだ。親から子へと幾世代もの生活が引き継がれてくるなかで、彼らの身近にある植物について、生活との関わりで実践的かつ多面的な深い検証がなされてきているのだ、という思いがした。今日的な課題としては、そうした経験則として確立してきている在来の知識、伝統的な利用技術について、現代科学の目による理解を深め、持続的な利用法の今日的な継承を図ることが求められているのだと思う。

モロゴロからダルエスサラームへ戻る道すがらでは、黄色い花をつけたアカシアが人家の近くに植えられている光景や、ユーカリが道路脇に10数本ほどかたまって植えられている場所、あるいはまた、サイザル織りの繊維原料としてかつてはタンザニア国内の至るところで盛んに栽培されていたという、サイザル（植物）の畑が広がっている光景も見かけた。国際経済の動きのなかで、現在ではサイザルは競合品の化学繊維等に負けて価格が落ちてしまい、生産しても採算が合わなくなってしまったらしい。途上国が経済的に発展を図ろうとする局面で、その現実はとても厳しいものがあることを、広々としたサイザル畑の光景に触れて、改めて感じたことであった。

本稿を締めくくるにあたって、ひとつだけ書き留めておきたいことがある。JICA ケニア事務所の長期専門家F氏が“発見”した、ケニア中部にある森林の話である。その発見に至る詳しい話は不明だが、ケニアの首都ナイロビから北東250kmのエルドレットという町の北方に、縦横それぞれ数キロメートルにおよぶ広大な森林地帯があつて、過去200年以上にわたり、その付近の住民が森林を消滅させないように伐採を厳しく制限しあい、保全に務めてきたという。F氏はすでに一度、その森林を訪ねてきたということであった。日本でも木曽の森林などで、“御留め山”などとして、住民の森林内への立ち入りや森林利用の仕方について、（藩が強制的に）制限を設けて保全を行った事例がある。それに似た（しかも、住民主体の森林保全という）事例がケニアに大昔から存在していたとなると、とても興味深いことである。

実は、その話を聞いて思い出したのだが、ひょっとすると3月2日の早朝に私は、ロンドンからナイロビへ飛んだ際の飛行機の窓から、その“幻の森林”

を見かけていたのかも知れないのである。今に機会を作って、是非ともその森林の実態を自分自身の目で確かめてみたいものだと考えている。

(名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授)